



厳しい冬に雪の下で耐える種こそが、
太陽の恵みを受け、春になれば芽が出る。



あべの観音だより 第81号

[無憂山 法観寺・高野山真言宗 法真寺]

う ま く い く

馬九行久



■ 左馬とは、通常右向きに描かれる馬の姿を左向き(逆さ)にした縁起物の象徴。

- ・「うま」を逆から読むと「まう（舞う）」となり、昔から福を招く吉祥とされている。
- ・ 左馬は馬が人を引いてくるように見えることから「お客さんを招き入れる」商売繁盛。
- ・「馬」の字の下の子が巾着の形に似ており、口が締まりお金が散逸しない富のシンボル。
- ・ 馬は左側から乗ると転ばないと言われることから、人生においてつまづかない、厄事に見舞われないという意味に繋がり「安全祈願」の象徴とされている。

※「発展」「成長」「努力」の実り、「神の使い」、「勝利」「出世」「商売繁盛」など縁起にとっても良いとする思いが込められています。

ひのえうま
「令和八年度（丙午）」

あべの観音だより

仏教

【発行所】

高野山真言宗 法真寺
あべの観音無憂山法観寺
大阪府阿倍野区阪南町三・四一・十七
電話 〇六（七五〇九）三八〇六



ときに常識を疑うことで
新しい自分に出会える

現代社会における人間の生き方は法律
と“人工知能（AI）”コンピュータに
支配されつつあります。

日常を過ごす時間は諸行無常であり、
時代が変化する境界線はなく、気づくと
進化や変化された時代になっていたと感
じると思います。

科学が進化し過ぎて、
心が追いつかない現代

現代人は世の中の倫理（社会的規範）
の中に作られた法律に縛られ、目に見な

い社会の在り方に心を寄せている傾向や、
そこに生きにくさを感じ、苦悩している
人たちも少なくない現代社会です。
現在日本での法律の数をご存じでしょ
うか？ 約8,700もの法律があります。

昔は犯罪によりて苦しみ、
今日は法律によりて苦しむ

イーガブ
e-Gov法令（憲法・法律・政令・勅
令・府令・省令・規則の法令の電子デー
タ）を見ると、現行法令の数は、法律が
約2,069件、政令・勅令が約2,392件、
府省令が約4,253件の合計が約8,700件
あります。年々国会では法律の改正や増
減もありますが、そう数は変わって
いません。

わたしたちはこの法律の中で生きてい
ますが、これを日本では法治国家と称し
ています。

これだけ膨大な法律の数を弁護士でも
変化し続ける時代の法律を知るのは困
難です。昨日まで合法とされていた法律
が突如として違法になっていたりします。

何が正しくて、何が不正で
法律がすべて正しいのか？

特に現代は、法律や社会的規範となる
倫理観を備えながら生きていかなければ
ならず、この法律が際立つ時代になりま
した。法律とは「社会秩序を維持するた
め。国民が自由かつ平等に暮らしていく
ため」を基本機能としています。

生きるものすべて欲する

最終目的は「自由」です。

法観寺・法真寺 住職

「法律なければ犯罪なし」という言葉もありますが、ここ観音だよりでは“犯罪”のみを示唆しているではありません。法律だけで社会や人の善悪を判断していくのではなく、人が作った法律だからこそ、ときにはAI（人工知能）や収集されたデータだけで判断するのはなく、人間がもつ「人情」を優先して善悪を裁いていくことが必要な時代に期しているとわたしは言っているのです。

法は貧者をしいたげ、
富者は法を支配する。

ゴールドスミス（1730―1774）

人間社会では、ルールを作る側が圧倒

的に有利なのは疑いの余地がありません。ルールを作る側に回ることができなければ、ルールに従わされる人生が待っています。資本主義の唯一の救いは、そのどちらに属するかを本人の努力によって決められる点にあることです。

人々の善が最高の法律である

キケロ（紀元前一世紀）

変化が多い現代社会、何ごとにも善悪を法律で裁いていくことが善悪の基準となり、法律が優先されている時代です。

日本でも人口が老若かぎらず増加し、国民の意見も取り入れることも必要であり、偏見なきよう2009年より裁判員制度（法廷で証人の証言や証拠を見聞きし、裁判官と同じ権限のもと、被告人が有罪か無罪かを判断し、有罪の場合、刑の内容を決める制度）が導入されました。

法律の主体性は“平等”であり、人

が生きていく自由のために存在しています。しかし昨今では法律の乗っ取るだけの機械的（感情や思考を伴わない）、AI判断（人工知能）に近似しているのではないかと感じます。これはいわば人間の尊厳を無視していることをも示唆でき、心を重視していないと感じます。



ひと昔前ならば、裁判にまで至らず奉行（公事および私事を司る立場）

のような頼れる仲介人たちが町の中には数人は居たものです。しかし現代はそのような立場の人も少なく、すべてを法律に任せる環境社会へと化しました。

人の道

忘れてならぬものは「恩義」
捨ててならぬものは「義理」
人にあたえるものは「人情」
繰返してならぬものは「過失」
通してならぬものは「我意」
笑ってならぬものは「人の失敗」
聞いてならぬものは「人の秘密」
お金で買えぬものは「信用」

上記のお言葉は、江戸時代末期の武士
新選組局長・近藤勇氏（1834・1868）のお
言葉と諸説（出典不明）ありますが、近
藤勇氏のお言葉と思います。

この上記の八箇条の「人の道」は、と
ても人間の“理に適うもの”があり、
全国的に流布している有名な理念です。

わたしたち“人間”の生き方は仏教
では「戒律」という仏様と約束（誓願）
して、後退しないという不退転の信念を
保持しながら日々精進（努力）します。

この戒律とは二つを合わせた造語です。

戒・・・道德（自分との約束）
律・・・倫理（社会的な規範）

人間には「欲」が他の生物に比べると、
注意力が散漫するのが人です。「〇〇が
したい・〇〇であってほしい」などです。

どくせん
毒箭を抜かずして、

らいしよ
空しく来處を問う。

『性霊集』・空海・

弘法大師（空海）の“毒箭”とは、
毒の矢という意味で、わたしたちの人生
の心に害をもたらしている事柄のことを
例えています。来處（来処）とは、その
矢が放たれた場所のことを指しています。
空海は先ず毒矢を抜くことを優先しな
さいと言っているのです。

何を優先しなければいけないのか？
ときに自分自身にその本質とは何で
あるのかに迫ることが必要です。

普遍的に人の生き方見ると、一日の大
半を仕事に費やしていることと思います。

- ・どうしたら仕事がうまくいくのか？
- ・どうしたらお金を稼げるのか？
- ・どうしたら早く楽になれるのか？

など、満たされても満たされない心に、
「欲と煩惱」から起こる当然のことを人
の脳裏は常に駆け巡っており、その中で
も人はやはり結局のところ仕事を優先
しがちではないでしょうか？

お金がなければ生活ができないからと
決めつけています。少々体が辛くても
「仕事だから」の一言で片づけ、働きに
出かけています。

世間も真面目に仕事をして、収入を得
て、生活している人を「一人前」と評価
します。

家族や友人との約束も、日本人は急な
仕事が入れば「仕事なら仕方ない」と皆
諦めます。 ※海外は仕事より家族を優先する国は多いです。

自分も周りも何より仕事最優先です。
では、あなたは仕事をするために生まれ
てきたのですか？と考えると・・・

「そうだよ」と胸を張って言える人は
少ないように思います。

基本的に仕事や勉強も同じく、苦手で
面倒なものであると感じます。

連休明けなどではとても分かりやすく、
「あり、今日からまた仕事か」と溜息
つく人で満ちています。

どれだけこなしても、次から次へとや
らねばならないのが仕事ですから、キリ
がなく、これで終わったということはあ
りません。

こんな繰り返しをするために
この世に生まれてきたのか？

これではまるで苦しむために生まれて
きたようなものでないか・・・ふと疑問
に駆られることもあるでしょう。

一方でこうも考えます。「なぜ働くか？何を当たり前のこと言っている。こっちはそんな暇はない。こっちは働かなければ生きていけない。」と思うでしょう。

これもその通りなのですが、世の中の“見えない社会という鳥かごの中”に縛られていてるのです。自身の心が社会に支配されているのです。

たとえ身体は奴隷なるも、
精神（心）は自由なり。

『断片』・ソボクレス・

しかし問題はその境界にあるのです。「働かなければ生きていけない」には違いないのですが、働いてさえいれば、いつまでも生きていれるのでしょうか？また幸せが手に入るのでしょうか？

違いますよね？手に入るところか身体はやがて限界を来し、引退を余儀なくされることも私たちはどこかで知っているのです。そうです。答えは明らかであり、いくら働いていても死は待つてはくれないのです。

だとすればやはり、なぜ働いて生きるのか？の問題が生じます。

生……生まれること
老……老いること
病……病むこと
死……死ぬこと

仏教の開祖であるお釈迦様は右記の「生老病死」は生あるものはやがて老い、やがて病となり、死を避けられない真理に気付かれ、法施という人の生きる指針を説いていきました。

当たり前の毎日は自分限らず、大切な家族たちが事故や病気になる、看病や死

などが訪れると当たり前が当たり前ではなりません。その疾風怒濤のごとく予想外の展開なる人生に心は追いつかなくなるのです。この先どういう風な心構えで生きていかなければならないのかと心は彷徨うのです。これを仏教では「無明」と称し、頭で考える知恵ではなく、心が定まらず迷っている状態と無知と見做すのです。

ではどのようにすれば急な展開にかぎらず不安なく人生を歩んでいくことができるのかをお釈迦様はこの無明という不安定な心を安定させる教えを説かれたのが仏教なのです。

わたしたちには定命（寿命）があります。仕事さえしていれば、いつまでも生きられるわけではありません。

“生者必滅・会者定離”という生まれ来る者は必ず死を避けられず、会う者はいつか離れ離れにならなければならない

という真理を説きます。だからといって未来のことを考えては不安しか募^つらくなりません。

仏教では「ただ、今を生きる」ということを思念しなさいとし、その“今”という現在の心の中には「過去や未来」を思い入れてはならないことを説きます。繰り返しますが、やがて老い、病気になる、仕事もできなくなり、いつか死ぬのです。

人間は何万年も、
あした生きるために
今日を生きてきた

漫画家・手塚治虫氏（1928―1989）

無知ではやがて大海の真ん中で方角を知らずに、泳ぎ方ばかりに没頭した挙げ句、溺^{おぼ}れ死にいくようなものです。



「一生懸命働かないと生きていけない」主張は、大海原に遭難した人が「一生懸命、泳がないとおぼれてしまう」と言っているようなものなのです。

果てしない人生の海に遭難する全人類に、もっとも肝心な『どこへ向かって泳ぐのか』『なぜ生きねばならないのか』を問題提起し、その上で救助の大船（大乘仏教）の厳存と方角を示したのが仏教なのです。

今の時間を大事にできない人は、未来の時間もきつと大事にはできない。ここで自分らしく生きることができない人には、次なる道は開けない。

ラグビー選手・平尾誠二（1963―2016）

幸せや成功、そして失敗は後悔というものには実体はなく、感じる心です。その心は無^むという何もない空^{くう}なのです。



迷いを断てば世界観は変わることを信じる勇気を育むことが新しい人生と成る。弘法大師（空海）は今から千二百年前に唐（現・中国）に留学しました。当時の唐でも西安市はシルクロード東の起点とし、世界最大都市といわれていました。その世界観を見られた空海は日本の世界観（文化・思想）はおそらく小さく思えたことでしょう。

それこの太虚に過ぎて広大なるものはわが心、
かの法界を超えて独尊なるものは自仏なり。

『平城天皇灌頂文』・空海

右記の空海のお言葉は「心を広く持つことで世界観は広がり人生は豊かになる。

そして自分自身が仏であることを自覚できるのである。」と伝えていきます。

今回の最初のページでの題目に挙げました「ときに常識を疑うことで、新しい自分に出会える」と記しました。

この常識とは自分の得た経験から成しえた世界観でしかなく、無限大である心なのです。

自分のもつ世界観の心をもっと広げていくことが必要なものであり、わたしたちは社会に縛られたルールに無意識のうちに従っている大衆操作たいしゅうそうさなのです。

「大衆操作とは？」

大衆操作は、社会学用語であり、英語では「mass manipulation」と呼ばれて

おり、権力者が大衆の心理や感情を意図的に操作し、特定の行動や同調を促す社会統制の一様式のことです。これは、強制ではなく、シンボル操作などを通じて

自発的な同調を得ることを目的としているのです。いわゆる常識が無意識に転換されていくのです。

その罠わなに洗脳されることにより心には壁なんてものは無いのに自分自身で生きにくくしているのです。大切なのは・・・

「心にすこし余裕を入れる」

20%の余裕さえ確保できていればほとんどの事は上手いききます。

どんなに熟練された職人も、

余裕がない時は良い仕事ができず、

一流が一流たるゆえんは、

どんな時も余裕を無くさないこと

例外的なことは起こるもの。

いつも穏やかに対応できるように

「余裕を確保」しておくこと。

この20%は、一時間に例えると12分です。朝は忙しいものですが、この12分で余裕ができるのです。

例えば「でも、もう少し寝たい」など余計な言い訳を自分で作ります。

何をやるのかを
決めるのは簡単。
何をやらないかを
決めるのが難しい。

Deii創業者 マイケル・デル（1965—）

選択肢が多い時代だからこそ迷うのも当然の現代です。特化するのは携帯電話（スマートフォン）です。手放せないことで大切な時間を奪われがちです。

後悔を前借りするのではなく、慣れ親

しんだものを手放すことが勇氣であり、ほんの少し仏教を学ぶ意識と時間を持つことで死への恐怖からは離れ、生きる本当の目的（本質）が見えてくるのです。

合掌

開運厄除け星まつり（節分会）

寒冷の候、皆様にはますます御清祥のことと存じます。

人は誰しも年々の「気」を受けて日々を過ごしております。その吉凶は、年ごとの「当り星」によって左右されてきます。人の吉凶を司る九つの星々は「九曜星」といい、表の表に示してある通り、その人の年齢とともに年々順に廻って来ます。この九つの星の巡りにより、良い年と悪い年が来るのです。「星まつり」は、年の変わり目である節分にその年の「当り星」を祭り、悪い年は災難を免れるよう、また良い年は一層良くなるよう法観寺においてご祈禱いたします。

「節分」は2月3日です。年の節目であり、厳しい冬の季節を乗り越えた後の2月4日「立春」は一年の始まりで昔から尊ばれ、節目である節分は邪気が入りやすいことから、邪気を抱えたまま新年を迎えたくない。そんなことから節分では「鬼は外、福は内」と豆まきの風習もあり、全国の護摩壇がある寺院では、皆さま方に良き新年をお迎えいただいてもらえるよう心を込めて護摩の修法しております。

◎ 令和8年の恵方は丙午（ひのえうま）＝南南東やや南（時計回りに165度）です。◎

太陽のような明るさや情熱、強い意志、行動力やスピード、エネルギーを意味します。勢いがあり、勇敢で独立心が強いのが特徴の年です。

※恵方とは今年（立春）の吉方向であり、古くは正月の歳神様のご来臨する方向です。

「護摩祈願札」

（※本年より”金の紙札に”変更）

◇申込書は1月20日までに、ご返送くださいませ。

◇2月3日の星まつりにご参加できない方の祈願札は、後日「郵送」いたします。

◇祈願札の代金は、指定口座へお振込みのほどお願い申し上げます。

※振込手数料はご負担のほどお願い申し上げます。

◇2月3日ご来寺します方は当日代金でも大丈夫です。祈願札も当日にお渡しいたします。
※事前申し込みが必要です。当日には祈禱札の記入が間に合いませんことご了承ください。





あべの観音 令和8年 星まつり護摩祈禱のご案内

2月3日(火曜日) 午前10時より

護摩の修法は、奥深い内容を秘めた意義と、真言密教の教理に裏付けられた荘厳な宗教儀式です。お護摩とは、梵語でホーマといい、「焚く・焼く」などの意味をもつ言葉で、仏の智慧の火を以て煩惱(苦の根元)を焼きつくすことを表します。お護摩は、御本尊のご宝前に設けられた護摩壇の周囲に香華をはじめ五穀、お供物を供え、斎戒沐浴して心身を浄めた導師が、中央の炉の中に護摩木を焚いて、護摩本尊である大日大聖不動明王に祈願し、極めて厳粛な秘法です。お護摩によって、皆様の煩惱を焼き浄め、大厄を消除し、すすんで家内安全、病氣平癒、心願成就など、開運の祈願をなされますことをおすすめいたします。

あべの観音 無憂山 法観寺
高野山 真言宗 法真寺

〒545-0021

阿倍野区阪南町三丁目四十一番七
電話 〇六(七五〇九)三八〇六
発行人 住職 指宿法源

令和8年
丙午年

九星に因る本年の運勢(かぞえ歳)と吉凶

※年齢は左記図の「かぞえ歳」です。ただし、1月1日～2月3日(節分)までにお生まれの方は、さらに一歳加えて下さい。
※十月十日(とつきとうか)、人が胎内に生を宿している時から数えます。

○ 木曜星 (大吉)	○ 月曜星 (大吉)	● 計都星 (大凶)	● 火曜星 (大凶)	○ 日曜星 (大吉)	● 金曜星 (半吉)	● 水曜星 (末吉)	● 土曜星 (末吉)	● 羅喉星 (大凶)
此の星に当る人は運勢漸く聞の象に 意を欠く損あり目上、目下の注 意を聞き性急を慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く聞の象に 意を欠く損あり目上、目下の注 意を聞き性急を慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く聞の象に 意を欠く損あり目上、目下の注 意を聞き性急を慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く聞の象に 意を欠く損あり目上、目下の注 意を聞き性急を慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く聞の象に 意を欠く損あり目上、目下の注 意を聞き性急を慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く聞の象に 意を欠く損あり目上、目下の注 意を聞き性急を慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く聞の象に 意を欠く損あり目上、目下の注 意を聞き性急を慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く聞の象に 意を欠く損あり目上、目下の注 意を聞き性急を慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く聞の象に 意を欠く損あり目上、目下の注 意を聞き性急を慎むべし
九紫火星	八白土星	七赤金星	六白金星	五黄土星	四緑木星	三碧木星	二黒土星	一白水星
平成30年生	令和元年生	令和2年生	令和3年生	令和4年生	令和5年生	令和6年生	令和7年生	令和8年生
9	8	7	6	5	4	3	2	1
平成21年生	平成22年生	平成23年生	平成24年生	平成25年生	平成26年生	平成27年生	平成28年生	平成29年生
18	17	16	15	14	13	12	11	10
平成12年生	平成13年生	平成14年生	平成15年生	平成16年生	平成17年生	平成18年生	平成19年生	平成20年生
27	26	25	24	23	22	21	20	19
平成3年生	平成4年生	平成5年生	平成6年生	平成7年生	平成8年生	平成9年生	平成10年生	平成11年生
36	35	34	33	32	31	30	29	28
昭和57年生	昭和58年生	昭和59年生	昭和60年生	昭和61年生	昭和62年生	昭和63年生	平成元年生	平成2年生
45	44	43	42	41	40	39	38	37
昭和48年生	昭和49年生	昭和50年生	昭和51年生	昭和52年生	昭和53年生	昭和54年生	昭和55年生	昭和56年生
54	53	52	51	50	49	48	47	46
昭和39年生	昭和40年生	昭和41年生	昭和42年生	昭和43年生	昭和44年生	昭和45年生	昭和46年生	昭和47年生
63	62	61	60	59	58	57	56	55
昭和30年生	昭和31年生	昭和32年生	昭和33年生	昭和34年生	昭和35年生	昭和36年生	昭和37年生	昭和38年生
72	71	70	69	68	67	66	65	64
昭和21年生	昭和22年生	昭和23年生	昭和24年生	昭和25年生	昭和26年生	昭和27年生	昭和28年生	昭和29年生
81	80	79	78	77	76	75	74	73
昭和12年生	昭和13年生	昭和14年生	昭和15年生	昭和16年生	昭和17年生	昭和18年生	昭和19年生	昭和20年生
90	89	88	87	86	85	84	83	82
昭和3年生	昭和4年生	昭和5年生	昭和6年生	昭和7年生	昭和8年生	昭和9年生	昭和10年生	昭和11年生
99	98	97	96	95	94	93	92	91
大正8年生	大正9年生	大正10年生	大正11年生	大正12年生	大正13年生	大正14年生	昭和元年生	昭和2年生
108	107	106	105	104	103	102	101	100

※赤字は本厄です。女性は19歳33歳37歳、男性は25歳42歳61歳

は男性

は女性

家内安全	身体健全	平穩無事	無病息災	病氣平癒	便秘改善	運氣改善	心願成就	厄難消除	除災招福	開運招福	身心堅固	家運隆盛	夫婦円満	子宝成就	子育健全	良縁成就	社運隆盛	商売繁盛	事業繁栄	学業成就	就職成就	諸芸上達	交通安全	希望(四字)
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25

※ 上記、ご祈願一例です。他ご希望の際は四文字以内にて承ります。

令和八年（2026年）年忌表

一 周 忌	令 和 七 年
三 回 忌	令 和 六 年
七 回 忌	令 和 二 年
十 三 回 忌	平 成 二 十 六 年
十 七 回 忌	平 成 二 十 二 年
二 十 三 回 忌	平 成 十 六 年
二 十 五 回 忌	平 成 十 四 年
二 十 七 回 忌	平 成 十 二 年
三 十 三 回 忌	平 成 六 年

（亡くなられた年）

供養とは故人と再会できる大切な時間

故人を偲び、命の洗濯ができる最大の法要が追善供養です。

追善とは「追福修善」あるいは「追福作善」を略したもので、追福、追薦、追孝ともいいます。「薦」という字には「たてまつる」とか「供物」という意味があり、「追」の字にも「後を慕う」「慕いまつる」という意味があり、追善する者（遺族等）は亡き人へ善い事を修め、供養を施し冥福を祈ることを意味します。

人の死後は霊は果報が定まらないので、善根を追修してその功德を亡者に捧げ、三途の苦報を免れさせようとしたりする救済が供養なのです。かくて、四十九日忌・百廿日忌・一周忌・三回忌・七回忌などの忌に法要を営み、その功德を亡き人に回向するに至ったのです。故人の福を願うに至るは人間の至情の然らしむる所です。わたしたちの身心というものは、独力して生誕することはなく、祖先との合作である合縁奇縁による恩恵の生命です。わたしたちは愛育され成長し、先祖からつながる命が今あるのであり、感謝を伝え、報恩する大切な機会も追善供養の大切な意義なのです。

生きている命は、真心こめて育てていただいた恩徳五岳より高く、四瀆よりも深く尊いといわれます。この高大なる恩徳を思うときに報恩感謝の行事をしなくてはおれなくなるのです。これが宗教的行いとなるのです。

親は子を思い、子は親を思い、大切な人を思う。この親愛の情が育まれていくとき、生けるものは相互扶助、家門繁栄、共存共栄の実を結ぶしむることとなり、死者に対しての追福修善の報恩行、冥福を祈る宗教行事となるのです。

経典『梵網經』の中に「不救存亡戒」というのがあります。それは、仏教を篤信する者は慈悲の心をもってすべての生者死者に対して慈悲の行業をなさねばならぬことを述べ、特に父母兄弟等の家門の親しい先亡精霊に対しては、冥界における幸福を資けるために追善供養を勤むべきことを勧めています。

供養し功德を手向けることで感応道交され、仏の力で守ってくれる「はたらき（応化利生、応用無辺）」の功德を回向してくれているのです。